

第二期 第百号 (二版) (無料)

# 音信不通

本のビオトープ

学びあう人々のために

2024.11.10 定有堂書店 発行

## 特集「わたしの『音信不通』」

忽然と消える

『本屋のパンセ』

対面でもなくオンラインでもなく——祝一〇〇号！

『音信不通』の私と邂逅

『音信不通』と『本屋な日々』

『定有堂ジャーナル』から『音信不通』へ

『音信不通』と私と

『音信不通』でお友だち

印象論：縁者から見た奈良敏行

〈沫雪〉のまぶしや

Leave them all behind

『音信不通』一〇〇号発行に寄せて

「本の人々」が住む森——『音信不通』と私

今日の日記と、音信不通

奈良敏行

三砂慶明

岩田直樹

木元健二

石橋毅史

南陀楼綾繁

松田裕史

浜辺眞砂代

古賀啓三

白井明大

高木善祥

内田克彦

萩原俊郎

鳥居貴彦

わたしの「音信不通」

宛先不明

「さよなら」を告げて

わたしの音信不通

私と音信不通

気がつけば その二

…… 編集後記

村瀬謙介

ムラカミヒロミ

三浦永理

齊藤仁昭

あきの素生

ドラマメリア

忽然と消える

奈良敏行

(定有堂 主人)

定有堂教室「読む会」講師の岩田直樹さんが、次回は「音信不通」が百号を迎えるので、「わたしの『音信不通』」という特集にしたかどうかと提案くださった。みんな好き勝手に書いているので、それは迷惑ではないかためらったが、執筆者の方々はそれぞれよく互いを知っているわけではないので、ここらで一息ついて、自己紹介してみたスタンスで書けばいいのではないか。いい機会だと思おうようになった。

私的な話になるが、『音信不通』には一期と二期がある。一

期は本屋を始める前で個人誌だった。思索し書き記し、忽然と消える。この「消える」という言葉のさわやかさが気に入って「音信不通」という誌名を思いついた。

わたしの十代は自分の成長よりも時代の変遷のスピードの方が速かった。いつも「間に合っていない」という焦りがあった。一九七〇年前後のことだった。この「焦燥」からの脱出が思索のテーマだった。この焦燥をランボオの詩集で言語的に体験していた。形にできない焦燥をランボオの言葉で具現化できると信じていた。「地獄の季節」「イリュミナション」がそこにあった。

『音信不通』が希望であることを告げるためには、この二つの詩集がなんであったかをどうしても語らなければならぬ。

しかし、本屋であった四十三年、ランボオ体験を語るその機会はなかった。「事件」をここで共有されるとは思えなかったからだ。眩暈と焦燥の時空は忽然と消えたが再びここに立ち現れた。消えてたどり着いた場所からもう一度消えて、ようやくランボオのことが語れそうな気がする。本屋の時代は、手にしても何一つ心に訴え、蘇るものはなかった。

わたしはランボオのどの言葉が好きだったのだろう。ほとんど誰も関心を向けない一文だ。「おれは夢見たものだった。

た、……報告も残らぬ探検旅行を」。探検記がないわけではない。あつても探検者「と忽然と消えたということだ。この「探検記」はきつとすばらしい。世に出なかつた見聞ほどすばらしいものはない。

《俺は沈黙を書き、夜を書き、描き出す術もないものも控えた。俺は様々な眩暈を定着した。》

と詩人ランボオは書く。行つて帰らぬ探検者も、この「眩暈」を書き記しているはずだ。

『音信不通』の「ころ」は、「忽然と消える」という、とりつく島のなさだ。

その第一期『音信不通』と同じ頃、わたしは個人誌でなくゆるい同人誌的な趣向で、『定有』という小冊子も作っていた。小冊子なのだがみんな全力で寄稿してくれた。一人一人の書きたいことを尊重するという方針がよかったのかもしれない。ある何かを共有しつづける読書圏の人たちということもよかつたと思う。わたしは、「小冊子だけど」初出誌「だと考えてね」と求めた。いつか単行本を世に問うことがあれば、初出誌『定有』と記載してね、という暗黙の了解だった。消えるのはわたしだけでよかった。本屋を始めて数年した頃、五人くらいの人たちが本当に書物の後ろに記載していた。

「結末を入口とする」というのが、『音信不通』の方法論だっ

た。忽然と消える、これが入口でもあり出口でもある。

定有堂という本屋は忽然と消えたのだが、その数年前からたゆまず毎月刊行されている第二期の『音信不通』はいまだ健在だ。願わくは寄稿者の方々にとって、「初出誌」であって欲しい。

もう一つ、ランボオ詩集の中に好きな一文がある。

《ゴールの西岸、アルモリックのほとり。夜が来たら街々に灯るのかしら。役は終わった》

遅からぬいつか、忽然と、「役は終わった」と別れを告げるのだろうか。

2024.10.25

(参考)

アルテュール・ランボー 小林秀雄 『地獄の季節』 岩波文庫

2008

粟津則雄 訳 『ランボオ詩集』 現代思潮社 1968

定有堂教室「読む会」(講師 岩田直樹氏)

11月26日 火曜日 19時から

テキスト 今濱裕美子『物語 チベットの歴史』中公新書

会場 とりぎん文化会館 第6会議室

◇

定有堂教室「ドウルーズを読む会」

(講師 岩田直樹氏 公立鳥取環境大学特任教授)

12月5日 木曜日 19時から

会場 とりぎん文化会館 第6会議室

◇

定有堂教室「読書室ヒオトープ」

11月14日 木曜日 19時から テキスト ルシア・ベルリン

『掃除婦のための手引き書』 講談社文庫

会場 とりぎん文化会館 第6会議室

◇

太極拳教室(葉香クラブ)会場 二カ所

毎週 水曜 19時半から 市役所 麒麟スクエア

・土曜 13時半から 市役所 麒麟スクエア

講師 日本武術太極拳連盟 四段公認A級指導員(奈良)

公認B級指導員(みちる教練)

## 『本屋のパンセ』

三砂 慶明

(「読書室」主宰)

定有堂書店で、はじめて『音信不通』という小冊子を見つけたときは、素敵なタイトルだなあと思いました。書店が作る小冊子は、レジで配ることが多いのに、なぜかレジではなく書棚と書棚の間のちよつと隠れた場所に置いてあって、本当にもらつていいの不安になりました。レジで、「この小冊子いただいていいんですか」とお声がけしたら、「よく見つけましたね」と奈良敏行さんが喜んでくれて、なんだか不思議な一日でした。

岩波国語辞典によると、音信不通とは、「たより・連絡がまったくないこと。」です。

文例は、「上京後、五年間音信不通の息子」。

ここからは私の勝手な語釈であり、完全な親目線ですが、連絡ぐらいいよせよ、と思いつながら、便りの無いのは良い便り、という感じがします。心と心が通じ合っている同士が、それぞれ社会の片隅において、お互いをどこかで支え

合っている感じがして、この言葉、好きだなあと思いました。

書店の店頭は、駅のホームみたいに、多くの場合、一期一会です。でも定有堂書店の『音信不通』からは、奈良さんから差し出された手のようなぬくもりがあります。この小冊子を読んでしつかりと感想を伝えたら、たとえ、それがすれ違いだったとしても、それはもう奈良さんがかつちりと握手をしたようなものなのです。実際に私は定有堂書店にほとんど足を運んだことはなかったにもかかわらず、『音信不通』がご縁となって、交流させていただきました。それから定有堂書店の読書会に参加させていただきました。太極拳教室にも参加させてもらったり、寄稿させてもらったり、さらには定有堂書店が閉店する際は、同人の松田裕史さんがわざわざ、そのメッセージを込めた『音信不通』を鳥取から大阪まで届けてくださったりと、奈良さんとの交流は常に『音信不通』を介していました。

そして、驚くべきことに『音信不通』編集長ドラメリアさんとの雑談がきっかけで、奈良敏行さんと田中淳一郎さんとの共著『街の本屋はねむらない』（アルメディア）に続く、奈良さんの二冊目の本、『町の本屋という物語』定有堂書店の43年（作品社）の編集を担当させていただきました。



対面でもなくオンラインでもなく——祝一〇〇号！

岩田 直樹（公立鳥取環境大学特任教授・

「読む会」選書人）

第一〇〇号、誠におめでとうございます。第二期『音信不通』創刊は二〇一六年七月。二〇二〇年にはじまった三年間のコロナ禍を無事に乗り切り、二〇二三年四月一八日の閉店後も順調に号を重ね、大台に乗りました。

九九号も一〇〇号も一〇一号も継続していること自体の「めでたさ」は変わらない。少し天邪鬼な私はそう言いたくもありません。大谷翔平投手が五四本塁打、五九盗塁という史上初の記録を打ち立てたのに、「五五本、六〇盗塁だったらキリがよかったのに」という無責任な声があります。「何を言っているんだ！偉業には変わりないぞ」と思わず反論したくなります。

とはいえ、素直な（側面もある）私にとって、やはり一〇〇号到達は「とにかくめでたい」のです。

今回は、還暦を過ぎた年寄りらしく、昔話をしようと思いません。奈良さんのお誘いで、今までいろいろと書いてきたことについてです。私のモットーは「（身内はともかく他人には）絶対に昔話をしないこと」（第

八九回参照）です。お祝いの浮かれ気分で、禁を破ってもいいかな、という気持ちでいます。

私が定有堂書店にお世話になりはじめたのは一九九四年四月。早いもので三〇年が経ちました。濱崎洋三先生のお誘いで「読む会」に参加するようになったのです。

鮮明な記憶ではないのですが、晩冬のある日、奈良さんが私の勤務高校にお越しになりました（配達の途中？）。

「『読む会』に参加しませんか」と勧誘されたことを覚えていています。

「本は独りで読むもの」と思い込んでいた出不精な私はそんな「怪しい会」には出たくない、と即座に思っただけです。しかし、三〇年以上も「読む会」に参加し続けています。今でもふと「なぜ、『読む会』に出るのだろう」と自分自身に問いかけることがあります。答えは見つかりません。家族は「よく続くな」と感心します。

『町の本屋という物語』所収「奈良敏行・定有堂書店略年譜」によると、濱崎先生が亡くなる半年前の一九九六年四月に思想誌『定有』（第三期）が創刊されます（一九九九年七月）。創刊号のために「『根源的なるもの』をめぐって——科学論断章（第一回）——『一本の木』としての科学」を書きました。昨冬刊行の拙著『橋田邦彦・現象学・アーレントの再解釈』にエッセイを載せようとし

たとき、小取舎の村瀬謙介さんにこの小論を二七年ぶりに発掘していただきました。ベケット『ゴドーを待ちながら』と科学を無理やり結びつけようとした無謀な論です。

井狩春男さんの巻頭エッセイ「定有堂で朝食を」を毎月楽しみにしていた『定有堂ジャーナル』（一九八九年一〇月創刊）にも何度か拙論を載せたことがあります。

それまで単発で書いてきた私のフェーズが大きく切り替わったのは、『定有堂ジャーナル』の発展形として奈良さん手作りの定有堂ホームページが開設された二〇〇〇年六月。当時、勤務校の学校紀要（二月発行）に、四〇〇字詰め原稿用紙二〇〇×二二〇枚の論文を毎年掲載する以外は、定期的にもものを書く習慣はありませんでした。奈良さんに「ホームページに書きませんか」とお声をかけていただいたとき、おそろく断ったと思います。「書けるときに書いてみたら」と説得され、「今月読んだ本」というタイトルでエッセイをはじめました。

第三三回（二〇〇二年一二月）までは制限字数は六〇〇字でした。そのうち分量は自由になり、年七〜一〇回ペースで続けています。必ずしも「今月読んだ本」について論じるわけではありません。長い文章を何回かに分けて載せることもあります。現在まで二四三回を数え、

よく続いたな、と自分ながら感心します。今の悩みは、相当な分量になる連載稿をどう始末するかです。まとめて残したいのですが、印刷すると相当分厚くなり躊躇しています。

いよいよ『音信不通』の登場です。私は第五八号（二〇二一年五月）、第七〇号（二二年五月）の後は、第七二回からは欠かさずに書いています。「今月読んだ本」がひと月からふた月に一回、『音信不通』は毎月二五日締切。当初はとまどった棲み分けにも慣れてきました。ここ一〇回は、奈良さんのリクエストで「洋上での『転向』」というちようど四〇年前の昔話を連載しました。

『音信不通』同人のうち約四割の方とは面識がありません。当然、お声を聞いたこともありません。オンライン電話（疑似対面）が当たり前のこの時代に、まるで半世紀前にタイムトリップしたかのように、紙ベースの同人誌が存在する不思議さ（毎号、必ず紙冊子をいただいています）。

対面でもオンラインでもないにもかかわらず、毎月一回、皆さんと顔を合わせたような感覚になります。そんな『音信不通』が続くことを切に願っています。

## 「音信不通」の私と邂逅

木元健二

(新聞記者)

小学生の頃、理科の時間に「あぶりだし」をやってみた。みかんを絞った汁で書き、熱にあてると、ぼんやり文字が浮かぶ。黒板や教科書をはなれ、教室がにぎやかになった。蒸発とは水分が飛ぶこと、と教わったのはそのときだと思ふ。五十年近く前、大阪・千里ニュータウンに暮らしていた頃の話である。

団地の友だちの家に遊びに行く途中、異様な光景をふいに見た。その一室の玄関扉に「カネ返せ」と書き切れないほど書いてある。新聞受けにはあふれかえる督促状。殴り書きの文字から怒鳴り声が聞こえ、自分まで得体の知れない人に首根っこをつかまれるような恐怖にかられた。

昭和五十年代、「サラ金地獄」は社会問題として子どもにも入っていた。ぼんやりしたサラリーマン家庭の小倅も、サラ金とはえらく恐ろしいものだと思ひ知った。

そして、かさんだ借金を返しきれなくなって姿を消すのも、やはり「蒸発」といわれた。その場合の蒸発には他人とのつながりを遮断して、存在を消してしまう。そんな酷薄な響きがある。

さて、この同人誌のタイトルでもある「音信不通」はどうか。少し違うのは音信不通には、連絡を取りたくてもどうにも取れない、というニュアンスがあるように思う。

慌ただしく引越したきり、とか、長旅に出たきりで、その後どうしているのか分からない…。「今頃、どうしてるんだろう」。音信不通のあいつは憎めないやつとして、落語の人情噺に出てきそうだ。

ちなみに、同人誌には歴史がある。今では作家志望者の多くは文芸誌の新人賞に応募するが、かつては同人誌に作家を生み出すゆりかごのような機能があった。丹羽文雄が主宰した同人誌では河野多恵子、瀬戸内寂聴、吉村昭が修業した。北杜夫、佐藤愛子、中上健次、津島佑子らも別の同人誌で腕を磨いたという。

田辺聖子の芥川賞受賞作「感傷旅行」の初出誌が「航路」という名だったのも、何かを感じさせる。文芸愛好家の集う「原生林」というのもあったらしい。さぞや執筆陣のエネルギーがほとばしる誌面だったであろう。同人誌のネー

ミングは、集う人々をたばねる磁力を帯びている。

「音信不通」主宰の奈良敏行さんに尋ねたこともないが、含羞の人だけに、遠くにいる人に語りかけ、耳を澄ませているような…。勝手ながらそんなイメージを抱き、私も思うところを応答している。

新聞記者になって三十年余り。見たもの聞いたことを元手に心中の文字も拾いつつ、どうにかこうにか、かたちにしてきた。当たり前のことだが、自らのことを記す必要などなかった。

それが縁あって「音信不通」に書かせていただくことになり、原稿以外に書くことがあるかなあ、と不安もあった。でも自らのことなら案外、字数だけは書けるものだ。まあ凡人のことがおもしろいはずもないのだが。

大阪人の歩く速さは世界一。バブル経済が弾けた頃、そんな大阪人の生熊をユーモラスに描く『大阪学』というベストセラーがあった。著者は朝日新聞出身の大谷晃一さん。齢を重ねて体力が衰え、「自分で自分に取材をするようになった」と最晩年の取材で明かした。足で稼ぎ、無頼派・織田作之助らの評伝で知られた名記者も、持病の腰痛がひどくなり、取材に出られなくなったのだ。

ふと「最後の仕事」が話題になり、記者の感受性をいかに、自身の訃報記事を残しておきませんか、と勧めると、即うなずかれた。ただ再訪した折に書き上がった訃報のコピーを頂こうとしたら、こんな理由できっぱり断るのだ。

「葬儀会場がまだ決まってへんねん」

実務的な構えが、なんだかおかしかった。やがて気づく。そこにあくまでドライな感覚が働いていることに。自身の別れの場も、物書きの冷静な目で見通そうとしていた。

長年連れ添った妻が逝ったときは、悲しみを振り払おうと別離の四日目からパソコンに向かい、生涯をたどり直す「余生返上」という一作に結実させていた。

書くことは、「音信不通」になっている心中の自身との交信である。私の場合、書こうとして浮かんでくるのは三十歳ぐらいまでのことが目立つ。遠い日のことなら、それなりに客観的に見られるからだろう。なんてことのないことも、歳月の積み重ねで一文に変わる。

五十坂を下るおっさんは、全然忘れていた自分に行き当たり、底で何も変わっていないと気づく。あほやなあ。昔のおれもフフッと笑う。

## 『音信不通』と『本屋な日々』

石橋 毅史

(作家・出版ジャーナリスト)

『本屋な日々』という連載をしている。

トランスビューが「注文出荷制」（注文してくれた書店には要望どおりの部数を即座に発送する、注文していない書店には無理やり送りつけない）を方針とする出版社たちと共同で、書店向けに各社の刊行物をアピールするダイレクトメールがある。発行は月に一度で、『本屋な日々』はこのダイレクトメールに付録の読み物として同封される。「本屋」に関わる話題なら何でもよく、これまでは主に各地の書店の探訪記を書いてきた。

連載をしている、といったばかりだが、去年、店じまいを目前にした定有堂で買った本について五回書いたのを最後に、ここ一年ほどは休んでいる。

コロナ・パンデミックが起きた二〇二〇年も、長い休載をした。非常時こそ張りきるのが取材者だが、感染しないことを生活の最大目標にして閉じ籠ったら、何を書いている

いのかわからなくなった。同時期に新しい仕事が複数はじまり、そのなかには書く作業も含まれていて、そっちはできるのに『本屋な日々』は書けなかった。

いまの休載も同じで、他では書けても『本屋な日々』はできない。すごく個人的で大切な連載だから、というのは言い訳で、ゴールのないマラソンを走る胆力に欠けるんだ、他者への誠実さに欠けるんだ、だからがないんだ、と劣等感でいっぱいになることもある。

注文出荷制出版社たちのダイレクトメールは全国の書店に発送されていて、もちろん定有堂にも届いていた。奈良さんはいつも『本屋な日々』の感想をメールで送ってくれて、僕はそれを大きな励みにしていた。

ある日、奈良さんは、地域の人たちとこういうのを始めたんです、と『音信不通』の創刊号を見せてくれた。その後しばらくは実物を、ある時期からはPDF版をメールで送ってくれている。

定有堂のホームページを開けばバックナンバーを含めていつでも見られるのに、僕は毎月、奈良さんからのメールを待ち、読んで、ごく短い感想を返す。それに対して、奈良さんがまた返信をくれることもある。「音信不通で便りを交わす」というのも奇妙なことだが、保存して、時どき

読み返している。

僕が『本屋な日々』を休んだ二〇二〇年も、再び休んでいる今も、奈良さんからは変わらずPDFが届く。僕は『本屋な日々』との交換なのだと思えていたから、貰うばかりになって気が引ける。奈良さんは、また書いてね、再開してね、とただ励ましてくれる。

『音信不通』とは、遠くまで発信しない、限られた場所で完結する、そんな言葉を集めた小さなメディアである、という意味だと解釈している。

書くことを仕事にしたいと思った十代後半から自然と意識してきたことがいくつもあり、その一つが、読者に一読で伝わるように、わかり易く書くことだった。二十代後半から十数年、出版専門紙の記者をしたことも影響した。新聞記事は可読性が第一で、はじめの半年は文章の仕組みについて先輩記者の指導を受けた。

フリーのライターになって、すこしずつ考えが変わった。読み易さに縛られると、嘘が混じることがある。真に思っていることにたどり着かないことがある。身についた習性を捨てるのは難しいが、ときには読者にわかってもらおうことを諦めるのもいい。

『音信不通』の奈良さんの文章に、僕が習性にしてきた読み易さはない。でも、誰かに便りを出している。それが

誰なのか、わかるようではわからない。奈良さんのなかに棲む何者か、なのかもしれない。

その書き方は、読み手を能動的にする。知らない言葉や未読の本に目がとまる。「レザリエンス」は、奈良さんが使っていることで意識するようになった言葉のひとつだ。年月が経つにつれ、自身に浸透していくのを感じる。いつか肝心なところで使いたい。

『本屋な日々』が一〇〇回を迎えた時、奈良さんから「祝」と記されたメッセージカードを添えた贈り物が届いた。カードには《身の丈に完結している世界を、外部が解釈すると別のものになる》という、店じまいの近づく定有堂の店内で『伝えたいこと』に添えられていたポップと同じ一文が書かれていた。僕はその意味を考えながら、定有堂がどんな書店であったか、奈良さんがどんな本屋であったか、この先も何度か書くつもりでいる。

そして『音信不通』も節目の回に到達した。『本屋な日々』は一〇六回で休止中。背中をつつかれている。

祝・一〇〇号！ 冒頭の奈良さんから、しんがりのドラマリアさんまで、毎回、全部、読んでいます。

## 『定有堂ジャーナル』から『音信不通』へ

南陀楼綾繁

(ライター・編集者)

〈定有堂書店〉の奈良敏行さんと初めてお会いしたのは、1997年の第3回「本の学校・大山緑陰シンポジウム」だった。そのとき、『定有堂ジャーナル』（1989年創刊）を手渡されたかどうか忘れてはいるが、いつからか送っていただくようになった。

1999年に出た串間努編『ミニコミ魂』（晶文社）で、私は同誌をこう紹介した。

「毎月発行している書評誌『定有堂ジャーナル』では、売れる本よりも好きな本を紹介するコトに力を入れている。巻頭には創刊から続く井狩春男さん（このヒトもミニコミ好き）の連載、本文では毎回20人以上のさまざまな立場の人々が、自分の好きな本を紹介している。どの書評も短い字数ながら、しっかり読んで書かれているトコロに好感が持てる。『なんとなくやる』というやりかたで9年間続いていたが、この辺でなんとなく休んでみよう今年2月に休刊した。でもまあ、いずれまた『なんとなく』復刊しますよね、きつと」

ここにあるように、紙版『定有堂ジャーナル』は1999年に休刊したが、翌年から定有堂書店のサイトでウェブ版として復活した。

30名ほどが寄稿したというが、私も「私事しながら仕事する」を連載した。

まだ、ブログが登場するよりも数年前で、ネットで自分の文章を公開できる機会は少なかった。当時は『季刊・本とコンピュータ』の編集者である河上進と、ミニコミヤリトルマガジンに文章を書く南陀楼綾繁がいちおう別々の存在としてあり、その状態をこういうタイトルで表現したのだと思う。

このうち気に入った何篇かは、最初の単行本『ナンダロウアヤシゲな日々 本の海で溺れて』（無明舎出版）に収録した。

ほかにどんな文章を書いていたかなとネット検索してみたら、全然ヒットしなかった。25年も経っているから仕方がないのだが、ネットのコンテンツにはこういったはかなさがつきまとう。なので、この連載がいつまで続いたかは判らない。

そういえば、私は島根県出雲市出身だが、同じ山陰でも鳥取市はかなり遠いので、定有堂を訪れたことがなかった。その後も行きたいと思いつながら機会がなく、最初に訪れた

のは、最初の本が出た年の秋だった。

その後、何度か訪れたが、気づいたらいつの間にか『音信不通』というフリーペーパーが出ていた。2017年に創刊したという。

紙版『定有堂ジャーナル』は書評が中心だったが、こちらには定有堂に縁のあるさまざまな人たちの文章が載っていて、面白い。

実家に向かう列車の中で同誌を読み、久しぶりに自分もこの中に入れてほしくなって、「止まった時間のそのつづきから」という文章を書いて勝手に奈良さんに送りつけた。

そこで私は奈良さんと会う時の印象をこう書いている。「それでも、何年かぶりに立ち寄るたびに、前と変わっていないようになじみ深く、それでいて、どこかしら新鮮な印象を受けるのは、その人が『本屋である日々』を止めることなく、ゆっくりと更新しつづけているからではないか」勝手に送りつけたこの文章を、奈良さんは『音信不通』第31号に載せてくれた。

それで調子に乗って、第33号、第35号と書いたが、そこで息切れしてしまった。

自分が好きに書ける場が貴重だということは判っているのだが、日々の糧を得る仕事を優先してしまい、催促のな

い『音信不通』は後回しになってしまったのだ。これでは、「私事しながら仕事する」ではなく「私事しないで仕事する」ではないか。昔の自分に申し訳がない。

そのうち、また勝手に書いて送りつけよう。そう思っているうちに、定有堂は閉店してしまった。

しかし、今年2月、奈良さんの初の著書『町の本屋という物語 定有堂書店の43年』（作品社）が刊行され、その書評を書いたことを機に、第93号から『音信不通』の執筆者に出席した。

無理せず続けられるように、「『本のある場所』日記」と題して、直近にあった本まわりの出来事を綴るものにした。ブログを書かなくなって随分経つので、日記形式は久しぶり。そのせいか、いまのところ、新鮮な気持ちで書けている。

もっとも、なんとか続いているのは、ちょうどいいタイミングで催促してくれる奈良さんと、編集長のドラメリアさんのおかげだと感謝している。今後もなんとなく続けながら、次に鳥取市を訪れる機会を待ちたい。

（編集部案内）南陀楼綾繁 『「本」とともに地域で生きる』

大正大学出版会（地域人ライブラリー） 2024.11

## 『音信不通』と私と

松田 裕史

(高校教員)

『音信不通』の存在になぜあの日、気づいたのか、今でも不思議でならない。そのまま店内に置いてあることに気づかずに、いつまでも通り過ぎていてもおかしくはなかった。その翌日から、HP上のPDFで読める全ての既刊の『音信不通』から奈良さんと芝野先生の原稿を印刷し、読む日々をしばらく過ごした。

僕が『音信不通』に寄稿させていたのは四年前の四十八号が最初である。その原稿の最後は次のように締めくくっている。

世界を遊歴する「不通」という名の音信。今日もだれかに誤配される。

音信不通というのは実に不思議な名前だ。「淡雪」と「洙雪」の入れ子構造、「断念」と「始める」、などと同じ両義性はここにも立ち顕れている。不在を感じさせる言葉であるのに、確かな存在を内に宿している媒体の名でもある。

しかしその確かである存在は、どこにも届かない可能性も宿している。

九十九号の中で丸先生も言及されているが、『町の本屋という物語』の読書会の際に奈良さんは、「研究者は学んでいない」と言われた。その言葉は僕も引っかけかかっていた。東浩紀や千葉雅也は博士論文を元にした第一作を超えていないという岩田先生の言葉もあった。僕自身は、丸先生とは対照的にアカデミアの研究から遠のいていった人間だ。英米文学に関する論文もどきな文章は書けるが、それが自分の実存には触れることはあまりなかった。先輩の書く分析的な論文を読んでも、知的興奮をおぼえることもなかった(当時、大学のゼミの先生から聞いた話では、人文学系の論文の読者数は二人以下だということだ。つまり、読者は書いた本人ともう一人いるかないかということになる)。アカデミアから離れ、教育現場に生きる者のデイスコアと、大学のアカデミアの世界で活躍されている研究者のデイスコアを受け取る器 $\parallel$ ピオトープが『音信不通』である。お互いに音信不通になりがちな多種多様なデイスコア $\parallel$ 世界たちが吸い寄せられるように集まるのが『音信不通』。いつの頃からか、『音信不通』の副題に「学び合う人々のために」と記されるようになった。

今夏、「教育新聞」という媒体で連載記事を掲載させて

いただいた。その最終回では、奈良さんの言葉を引用した。その一部は、次のようになる。

「主体的・対話的で深い学び」が昨今、中等教育においても求められています。その主体は子どもではありませんが、日々、子どもと対峙している教師にも同じ学びが求められていると思っています。教師自身が学ぶ主体でなければ、どうして子どもが学ぼうとするでしょうか。小手先のテクニックでどうにかなるものではなく、教師が学び続けているなければ、深い学びは実現できません。その意味で、「主体的・対話的で深い学び」は教師にとって峻厳な言葉です。ICT環境がいくら整備されていても子どもの学びが駆動されるかどうかは教師次第です。子どもにとって最も影響力のある教育環境は相変わらず教師そのものだと私は考えられています。

4 技能5領域についてコミュニケーション能力を向上させることは英語教育における重要な命題です。一方、劇作家の平田オリザ氏は日本の子供たちのコミュニケーションに対する意欲の低下を指摘しています。能力の低下ではありません。平田氏によれば、「『伝える技術』をどれだけ教え込もうとしたところで、『伝えたい』という気持ちがある子どもの側にならないのなら、その技術は定着していかない」

(平田、2012、p. 25)。これは英語における言語活動にも言えることで、伝えるための必然性や動機がないのであれば言語活動がどんなに精緻に計画されていても内容は浅薄なものにならざるを得ません。私は、その点を克服するためのよすがを松下佳代氏(京都大学)が提唱する「ディー・アクティブラーニング」に求め、様々な言語活動を構想し、実践してきました。生徒のパフォーマンスをさらに高め、英語力ばかりでなく価値観や世界観の変容を促すような授業を今後も目指していきたいと思っています。

(中略)

最後に、次のような言葉を紹介したいと思います。

「本は「驚き」によって世界(存在)を開く、それは環境緊縛性から世界開示性への開かれてもであり、ときにそれが「自由」の体験であり、また「救い」でもある。」

これは、昨年(2023年)4月に多くの人に惜しまれながら閉店した定有堂(鳥取市)という本屋店主、奈良敏行さんの言葉です。(定有堂書店は書店員の聖地と呼ばれていました。)教育の本質もこの言葉と何ら変わりません。「本」を「教育」「深い学び」「授業」に換えれば、そのままそれらの定義となります。この定義に少しでも近づけるよう、私も学び続けたいと思います。

## 「音信不通」でお友だち

浜辺 眞砂代

(元「定有堂ジャーナル」編集長)

『私と「音信不通」』とお題をいただいてしまうと、「読者です」のひと言で言い切ってしまったえる関わりしかない。

先日、SHEEPSHEEP BOOKS さんが棚のレンタルを始められ、「ひと口どう?」と奈良さんから誘われた。お店には数回伺ったことはあるが、店主の高木さんとは面識がなく、「えっなんであたしに」、というのが正直な気持ち。山のように本を持っているわけでもなく、定有堂ビルに相應しい(と思える)本があるわけでもない。遠慮ではなく場違いという言葉が一番近い。

でもね、元定有堂ビルに本屋さんがあるのなら、あり続けて欲しいし、何らかの形で関わりも持っていたい、という気持ちの方がまさった。10月10日、借りた棚に20冊ほどの本やDVDを並べた。「まさよの本棚」。正確には本棚からあぶれた本棚だけど。この場がぐっと身近になった。

それにね、面識はないけど、知らない人ではない。だって毎月、高木さんも書かれている「音信不通」読んでるもん。これはじゅーぶん知ってる人だ(一方通行なので知り合いではないけれど)。

「音信不通」でお友だち、だ。

あたしは「定有堂ジャーナル」を作って楽しかったし、友だちが出来た。それに味を占め、今職場で「野の花通信」を作っている。診療所が発行しているものなら、市町村の健診やがん検診、各種ワクチンの案内なんてのを載せるのが定番なのかも知れないが、全くそんな気になれない。情報誌を作りたいわけではない。

開業前から作ろうと先生とは約束していたが、日々の仕事に追われ、1周年を迎える前に、と大慌てで1号を発刊。もう22年も前のことだ。

勢いで作ったは良いが、続けていく中で感じたことがある。誰でもないあたし(だけ)が作りたいんだと、一度ちゃんと身に染みるべき、ってこと。

定有堂で知り合う人たちは本好きという下地がある。そういうもののない中で形にするのは結構無謀。「なんでタイトルをつけないの」「なんで1200字と依頼してるのに1800字もあるの」「なんで800字って言ったのに原稿用紙一枚しかないの」「なんで、改行しないの」「な

んで今ごろ、締め切りギリギリはいつですかって聞くの。過ぎてるよーっ」。なんで、なんでの連続でパズルのような綱渡り。

そうはいっても、みんなえらかった。原稿依頼にしぶりながらも協力してくれる。続けるために大切なことはとても簡単。良いと思えるものを作る。人を過剰に気にしないこと。例えば、写真(職員に関しては仕事中に写したものはいちいち許可を取ってない。勝手に使いますね、とは言ってる)もあたしが美しいと思う、仕事中的もの。

つまり入浴介護中汗で化粧が落ちてしまったものとか、下を向いて二重顎、被写体として意識していないときのものが混じる。撮られることを意識し、背筋を伸ばしにっこり笑っている写真、ではない。「なんでこれを載せる」「ひどいーっ」と苦情が来る。「いい写真だもん」と答えば、苦笑いしながら許してくれている(と思う)。良いと思うものを作れば、大切にしたいと思ってもらえるものを作れば、協力しようかという気持ちが生まれるはず、と信じて続けてきた。

その時々では目の前の事だが、号を重ね、読み返せば野の花の今までになっていく。「ホスピス学校」やってた。「やもめの料理教室」やってた、やってた。「ホスピスボランティア養成講座」やってた。野の花の大切な記録。

同じ職場同じ時間を共にしていても、職種が違っていると見ていることが違う。それに加え診療所は24時間動いている。あたしがいなかった時、見てなかった時、知らなかった事が原稿として集まって来る。

考えると悲しくなるので、考えないようにしているけど、「野の花はなんとかやっています」の意を込めてご遺族の方にも送っている、きつと封も切ってもらえていないのがたくさんあるだろうということは分かっている。

ただ、裏表紙のレイアウトに隙間が出来た時に、「編集後記」を書いているんだけど、あくまで埋め草。2、3号続けて書かなかつたりすることがある。そうすると「辞めたかと思って」と電話がかかってきたりする。これが、嬉しい。あつてなきがごとき雑記なのに。島根県にある須我神社のことを書けば「私の生まれはあのあたり」と声を掛けてくださったり、植村直己記念館の建物が好きと書けば「私も私も」と話しかけてくれたり。読んでくださる方がここに、と実感できる。

「野の花通信」でお友だち、だ。

## 印象論…縁者から見た奈良敏行

古賀 啓三

(アメリカミシガン州在住)

奈良さんと僕は縁戚関係にある。普段、敏行さん、なので、以下それに倣う。遠い親戚であることはお互い知っていたものの、正確な続き柄はどちらも知らず、ずっとそのままになっていたが、僕らはどうも又従兄弟らしい、と敏行さん。千枝さん(奥様)に訊いてみたら、啓三くんのお父さんと、あなたのお母さんは従兄妹同士で、あなたと啓三くんは又従兄弟なんだと。と、ちゃんと整理してキープトラックしてました、千枝さん恐るべし、だって。

敏行さんと初めてお会いしたのは、僕が高校生のとき。何かの用でうちに訪ねて来られ、荻窪駅まで見送ると喫茶店に誘われた。「ひかり」という、こじんまりとした雰囲気の良い店であったが、今検索してみると「珈琲里」で、荻窪駅界隈では名店といわれた店らしい。当時早稲田の学生であった敏行さんが、なぜ荻窪くんだりのそんな店の存在を知っていたのか。喫茶店好きで、鳥取で商売を始める

にあたって、喫茶店か本屋、という二択であった、ということを、誰からか、聞いたような気がする。

この喫茶店で、敏行さんは高校生の僕に、君は煙草は吸うのか、と聞き、吸いますと答えると自分の煙草を勧めてくれた。何を話したか、よく覚えてないが、そのころの僕が読むべき本、十冊ほどのリストを、紙片にその場で書き下したものをいただいた。このリストは長いあいだ大切に持っていたながら、結局ほとんど読みませんでした、敏行さんごめんなさい。僕は後日アメリカの大学で、当時日本近代文学のクラスを受講していたガールフレンドと出会うまで、本を読むという習慣がなかった。

父親が土建屋で、周囲にあまり知的な人がおらず、初めてお会いした敏行さんに対しては、こういう人をインテリというのだな、という眞さんのような印象。その風貌にしながら、この人を文学青年と呼ぶす、誰を呼ぶ、といった風。父方には割とハンサムな男が多い。僕は母似。そういう鮮烈な印象を刻む出会いでありながら、それ以降またぷつぷつりと音信が途絶える。執筆のお誘いをいただいた経緯は90号に書いたので繰り返さないが、その次にお会いした際には定有ジャーナルへの寄稿をすでに始めていたので、恐らく初対面から二十年以上経っていたのではないか。

この小文では僕は「信頼できない語り手」以外の何もの

でもなく、全ての記憶があやふやで、印象に過ぎない。が、将来、奈良敏行研究が深化した際、こういう血縁の者の印象にも学問的価値（多分に色ものであるが）が発生するやもしれないので書いておく。

と、このように、定有堂営業時からその終焉まで、僕は全くの門外漢、傍観者で、その熱狂は敏行さんの一挙手一投足を鳥取で、砂かぶりで凝視していた人でないと語る資格はないのだろうが、ただ、敏行さんに対して一般が持つ、かつ本人も標榜しているかのようなイメージには幾つか疑義がある。親戚の印象として、なんですが。

まず文学嫌い、ということ。僕は小説の類は読まないの  
で、とご本人が言うのも聞いたことがあるが、敏行さんの  
文章からは詩の匂いにする。いただきたいリストにもランボー  
の詩集が含まれていたはず。選ぶ言葉は多層的に意味が凝  
縮されていて、現代思想の人の文章のよう。思想家  
(Thinker) には詩人と兼業する人もいるようだし。風貌  
もあれだし（笑）。

僕は福岡で「町の本屋」という店名の本屋を見かけて驚  
いた。町の本屋、というムーブメントには熱心なフォロワー  
が多いように見受けられる。今フォロワー、と書いて、ふ  
と使徒、という言葉が思い浮かんだ。以前、主人公の女の  
子に続々とフォロワーが発生し、付き従う、というカルト

小説を書いたのだが、このフォロワーを、“Apostles of  
New Being” 「『新しい人』の使徒たち」と呼んだ。その  
影響かもしれない。使徒の生ずるカリスマ性を嗅ぎ取るこ  
とは容易だが、僕には定有堂というのは、極めて敏行さん  
という個人の属人的営為で、敷衍化できることではないの  
ではないか、と感じている。例えば、敏行さんが本腰を据  
えてやれば、それが喫茶店であっても、煙草屋であっても  
知識人のサロン化したに相違なく、しかしそれは「敏行さ  
んが始めたこと」だから、である。

最後に「定有堂の閉店」奈良敏行という物語の終焉」、  
というNotionについて。先に文学嫌い、と書いたが、こ  
のところ定有堂の読書の会で課題となった小説の感想なん  
かもさかんに書かれている。いよいよ本腰を入れて執筆活  
動に専念され始めたかのようだ。終焉、というより始まり  
にしか見えない。先に「Thinker」という言葉も使ったが、  
定有堂の閉店は「Thinker」としての始動という、然るべく用  
意されていた人生の季節なのではないか。このところの一  
連のものごとの進み行きは、起るべくして起りつつあ  
る必然というのが、又従弟の受けている印象である。

## 〈沫雪〉のまぶしや

白井明大

(詩人)

思えば、定有堂書店で本を選び、同じ若桜街道沿いのちよつと先にあるボルゾイレコードでレコードを探す楽しみは、まるで八〇年代の中高時代まで時間を逆戻りしたような、本にしても、レコードにしても、その日見つけた宝物を大事に家まで持ち帰る間ずっと胸がドキドキと高揚してやまない、つくづく幸せな散歩コースだった。

奈良敏行さんは『音信不通』七九号の「沫雪」に寄せて「で良寛の歌〈淡雪の中に顕ちたる三千大千世界またその中に沫雪ぞ降る〉を引く。ひと粒の〈淡雪〉のなかにも世界があり、無数の〈沫雪〉が息づいているという歌。そして、こゝも述べている。

〈本屋が必ずしも「沫雪」の世界だというわけではないが、少なくともわたしにおいては、「どこかに行かなければ…」という焦燥につり合った、日常とはひとつ違った「沫雪」であった〉 (同)

この文章を一読、ふしぎな浮遊感をおぼえた。本屋が〈沫雪〉だと語る店主の日常の場所まで〈沫雪〉であるような。店の棚から選んだ本はどうなんだろう。本屋から通りに出たとき、本は日常の世界で風に当たっている。ぼくが部屋で本のページを開くとき、読書という〈沫雪〉の時間にすっぽりと包まれる。本屋に並び、読者の手許で開かれる本は、〈沫雪〉の棚から〈沫雪〉の部屋へと移行するあいだ、たとえ町中で日常の風を受けても、ただ眠っている〈淡雪〉にはつながらないのかもしれない。では、〈沫雪〉の棚から連れてきた本を、〈沫雪〉の時間に包まれて読むとき、読み手の心に〈沫雪〉の棚の光景が息づいていたら、その二つの〈沫雪〉はつながりを持ちうるのではないだろうか。

ボルゾイレコードの二階の窓辺に据えられた大きなスピーカーごしに若桜街道を眺め、信号を挟んだ斜向かいのカフェ、カルマを見やり、この光景をずっと目に焼きつけておけたらいいな、とぼんやり思いながら、試験盤に耳だけ傾けて過ごすひととき、心に届いてくるのはターンテーブルの上で回っているレコードの音だけでなく、店内を浮遊する目には見えない気分、手ではふれられない時間、でも確かに感じられる息づき、そういうものも含まれていると言いたくなる。そのひとときもまた〈沫雪〉かもしれない。

い。店を訪れては宝物を抱えて帰るぼくにはぼくの〈沫雪〉の時間があり、店という〈沫雪〉の世界とつながりを持ちうるものかもしれない。

ボルゾイレコード店主、前垣克明さんは時々、ふと思いついたような口ぶりで、こう声をかけてくれる。

「『音信不通』の新しい号が入りましたよ」

だからこの小さな冊子は、ぼくにとつて、耳から届いてくる。口づてに知り、手渡しで受け取るたび、そこに何かが息づいているのを感じる。軽やかな冊子を手にすると、手紙が届くのと似た印象をおぼえもするけれど、『音信不通』というタイトルを目にしたとたん、音信、手紙とはべつの何かが届いてきたんだ、と思い直そうとする意識が働いて面白い。

このミニコミ誌に息づく何かと通じるものを最近感じ、知る機会があった。『町の本屋という物語 定有堂書店の43年』（奈良敏行著、三砂慶明編、作品社刊）の読書会が、八月に県民文化会館で開かれた。

会でいちばん印象深かったのは、参加者のきらきらとした表情だった。ああ、この人たちの心のなかには、いまでも定有堂書店があるんだな、ほんとうに本が好きで、本屋が好きで、なにより定有堂さんのことが好きなんだな、と少しと少し感じられた。

『町の本屋という物語』には、たびたび「本屋の青空」という言葉が出てくる。それはどんな〈青空〉なのだろう？ ということを、この夜の読書会で知ることができたように思える。きっと好きという心のうちに本があり、本屋があり、定有堂書店がある、そんな人たちとともにした、あの場の上には「本屋の青空」が広がっていたのではないだろうか。これが奈良さんが書いていた〈青空〉の一つの景色ではないか、そう思われた。

読書会の日のことを思い返すたびに、参加者の一人ひとりのうれしそうな表情が浮かんでくる。あの表情、そこに映っていたものも〈沫雪〉なのではないだろうか、と思えてくる。定有堂書店という〈沫雪〉の世界を行き交う、また一つびとつのは〈沫雪〉のすがたをありありと目の当たりにできたように感じる。日常の世界がどう変わろうとも、内面の〈沫雪〉は揺るがない。〈沫雪〉と〈沫雪〉とのつながりもまた。

読書会、そして『音信不通』を通して伝わってくる〈沫雪〉のすがたが、本を読むことを介して生まれるよろこびそのものに思われて、ただただまぶしい。

# Leave them all behind

高木 善祥

(SHEEPSHEEP BOOKS)

大学二回生の後期、特に理由もなく大学に行くのが面倒になった。体調は心身ともに普通で、ワンルームマンションに引きこもっていたわけではない。とにかく面倒くさかった。かといって浪人するのは別の意味で面倒。必修科目を落とさないために、出席必須の英語の授業とゼミだけ、週に一回通った。級友にも心配されたが、どう説明していたのかは、忘れてしまった。

前期では「優」「良」だった科目はすべて「可」になった。「不可」にならなかつた自分の小狡さが、今は少しほほえましい。

三回生に進級すると、とくに理由もなく復帰し、何事もなく四年で卒業した。(阪神大震災を経験したが、それはまた別の話)

わかりやすいモラトリアムで、自分にとってには必要だった時間。そもそも人と接するのが苦手な暗い人間なので、

本当はこの時「ちょっと消えてみたかった」のかもしれない。音信不通へのあこがれ、人生の分岐点。

\*

秀才と呼ばれた高校の同級生がいた。数学オリンピックに選抜されるレベルの頭の良さで、あだ名は「先生」。京大に後期日程で合格し、物理学を専攻していた。が、数年後に色々な噂を聞くようになった。「大学にはほぼ行っていない」「麻雀ばかりしている」「彼女に麻雀と私とどっちが大切なの? と聞かれ、うっかり考えてこんでしまいボコボコにされた」から、「文系に移って仏教を学んでいる」「チベットで調査? 修行? に行った後、行方が分からない」まで。

結局十〇年以上連絡を取れなかつたが、ある日当時働いていたお店でぼったり出くわした。噂はだいたい事実で、お父さんが亡くなったタイミングで実家に戻り、今はディレクターをしている、など。

その後お店に何度か本を買いに来てくれたが、お互い面倒くさがりなので連絡先を交換せず、結局また一〇年以上会っていない。鳥取にいかどうかも分からない。

でも、なんとなくだが、多分そろそろこっちの店に来て

くれると予想している。

\*

昨年から、年賀状を送るのをやめた。やめた、というか  
厳密には、届いた方への返信しか送らないようにした。

自分から送らないのも失礼な話なのだが、値段も上がる  
ので徐々に減らしていこうと、家族で意見が一致した。改  
めて確認すると、こちらだけ送っていて、向こうの様子は  
全く分からない方も多く、音信不通ではなく一方通行。モ  
ノも人との関係も、整理が必要な年齢になった。

と言いつつ、年賀状だけのやりとりで近況を伝えあつて  
いる人も何人かいて、それはそれで悪くない。

\*

以上、“わたしの”音信不通でした。

昨年の十一月から書かせてもらうようになって、一度だ  
け飛ばしたが何とか続いている。いつも締切後に催促され  
てから送っており、発行が遅れているのは私のせいですス  
イマセン。

読者として読んでいた発行物に書き手として加わるのは、  
相応のプレッシャーがあつて、毎回何を書くか悩む。「本

と音楽とその周辺」というテーマのようなものだけあつて、  
切り口は変えているつもりだが、結局同じことを書いてい  
る。これからも同じことを書き続けていこう。

#### 【参考文献】

『センスの哲学』千葉雅也 文藝春秋

時々聴いているポッドキャストでおススメされていて、  
その時初めてアートの入門書だと知る（既に何冊か売って  
いたのに！）。特にファンというわけではないが、実用的  
なので千葉雅也の本は割と読んでいる。インスタで紹介し  
たらその日に売れました。

『共感と距離感の練習』小沼理 柏書房

タイトルがドンピシャでずっと気になっているが、まだ  
買っていない。練習したい。注目の書き手。

『橋の上で』湯本香樹実／文 酒井駒子／絵

「耳をぎゅうつとふさいでごらん」

そんな時間も必要で大切です。

鳥取あれこれ その九十九

## 『音信不通』一〇〇号発行に寄せて

内田克彦（地域研究家）

今回『音信不通』の一〇〇号発行を記念して、「わたしの『音信不通』」のお題が与えられた。思い起こせば、二〇一六年八月の『音信不通』の創刊時に、奈良さんから「いつものように」寄稿を提案されたのである。「いつものように」と書いたのは、以前に奈良さんが『ブックレット定有堂』などを発行するときにも寄稿を提案されていたからである。しかしながら、当時は仕事方面で頭がフル動員であったため、二回の寄稿に止まり、継続していくのは困難であった。

ところが、今回の場合は、定年退職後であって、時間に余裕があり、書いてみることにした。とはいえ、創刊号はさすがに遠慮し、二号から「鳥取あれこれ」と題して寄稿することにした。それから延々と毎号欠かすことなく寄稿し、前号で何と九八回を重ねた。最初はどんなことを書いていくのかスタイルは定まっていなかったが、最近では奈良さんのご好意に甘えて、ご迷惑かもしれないが、調べた

ことを発表する場として活用させて頂いている。

この間、コロナ禍が二〇二〇年春に始まったが、次に掲げる本の刊行を応援し、この「鳥取あれこれ」に寄稿した文章の一部がこれらの本の中に活かされることとなった。

○『愛郷 外交官澤田廉三の生涯』片山長生、二〇二〇年八月一日、「愛郷・澤田廉三」刊行会

※著作協力者である「『三愛のクニへ』研究会」のメンバーとして、資料発掘及び監修を行った。

○『使命―吉田喜久代 日本で最初の農村保健婦』佐々木美幸、二〇二二年六月四日、吉田喜久代研究会

※闘病中の著者を支援して、同研究会会長として全体を俯瞰しての章立て及び記述の補足を行った。

○『前進―「決定版」碧川かたの生涯―』碧川かた研究会

二〇二三年一月一三日、小取舎

※「第六章 禁酒運動から婦人参政権獲得運動へ」

・「第九章 先行文献」の原稿を書き、同研究会顧問として全体的な調整・記述の補足を行った。

また、『音信不通』という研究発表の場があったことで、

その後次に掲げる研究誌への寄稿を求められ、さらに詳細な研究を進めて、求められる字数に改稿の上、掲載された。

○「黒部みねぞうとは誰か―鳥取生まれの音楽家を掘り

起こして―」（わらべ館童謡・唱歌研究情報誌『音夢』

第一六号、二〇二二年三月三〇日）◇「鳥取あれこれ

その五十六」を改稿。

○「徳田秋聲と山田順子の出会いと碧川企救男」（徳田

秋聲記念館館報『夢香山』第一五号、二〇二三年三月

三一日）◇「鳥取あれこれ その三十四」を改稿。

さらに、「鳥取あれこれ その三」に載せた、杉原一司については、二〇二〇年には『杉原一司歌集』、翌年には鳥取大学地域学部岡村知子准教授らのご尽力により『杉原一司宛前川佐美雄書簡』、翌々年には『杉原一司 塚本邦雄往復書簡』が刊行され、加えて、杉原一司の実家から直近の丹比駅では「若桜鉄道丹比駅短歌・俳句まつり」が開催されるなど、隔世の感がある。

一方、「鳥取あれこれ その十六」に載せた、尾崎翠と田村熊蔵の関係について、尾崎翠研究家の石原深予氏に具

立図書館を通じて該当号の『音信不通』を送付したところ、「尾崎翠全集未収録作品および同時代評等の紹介』『論潮』第一四号、二〇二二年八月、論潮の会）で訂正された。

そのほか、鳥取出身の「河越照子」「小林富子」「河崎しず」「鈴木秋子」など全く地元では知られていない人物を発掘、紹介することができた。

いよいよ私の連載も次号で二〇〇回を迎える。この連載をまとめた自著の刊行を計画しており、実は小取舎には小取舎での刊行第一号を目指していたときに一部分を文字化して頂いている。しかしながら、最初の連載は八年前にもなり、その後の経過の補注が必要となっている。そのため、次号をもって一旦連載を中断し、自著づくりに専念することとしている。刊行後に再び『音信不通』の寄稿者に戻れるかどうかは分からないが、寄稿を再開したときは暖かく迎えてほしい。

蛇足だが、「定有堂書店ホームページ」には、現在一九号以降のみ公開されており、それ以前の号も何とか掲載して頂くことを望んでいる。二〇二四・一〇・一五

## 「本の人々」が住む森―「音信不通」と私

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

前にも触れたが、元いた新聞社が再来年春に復刊五十年を迎えるので、社史の編纂を手伝いに鳥取通いが続いている。作業の手始めは、まず昔の新聞を丹念に読み直すことから。

1983(昭和58)年3月2日、『水曜ヤング』というナウい若者に人気のあった笑(笑)ページに、こんな記事を見つけた。「リーフレット運動広がる 活字離れの若者にも」の見出し。「ユニークな『自分通信』が若者の間で広がっている」というキャプション付きの写真があり、けっこう大きい扱いだ(書いたのはたぶん四十一年前の私だろう)。そのまま紹介しよう。

◇ ◇ ◇

「『遠くの友人に手紙でも出すつもりで、自分の身の回りのこと、考えていることをリーフレットにまとめてみよ

う』。最近、鳥取市の書店を拠点に、若者たちの手によるユニークなリーフレット運動が広がっている。

発行者たちが「自分通信」と呼ぶB5判サイズのリーフレットは、『戒町通信』『セピアノート』『流れ星通信』『異端通信』など思い思いの題字がつけられ、発行部数はそれぞれ三十―百部前後。作っているのは学生、会社員などさまざまで、メッセージ、独白、哲学問答から近況報告まで、イラストをまじえて自由につづられている。

現在発行されているのは十五「誌」ほど。出来たリーフレットは印刷機(なんとプリントゴッコ)のある鳥取市元町の定有堂書店に置かれ、自由に持ち帰れるという気ままさだが、『活字離れ』といわれる若者から反響はなかなか大きい。

同書店店主の奈良敏行さん(34)は『昨年暮れに四誌出ると、新しいのが次々生まれました。みんなの間で、最近こんなことしてますよ、考えてますよ、と名刺代わりにリーフレットが交換されるといいですね』と、リーフレット運動に意欲を燃やしている。ちなみに発行費用は印刷の実費(千三百円)のみ。ユニークな自分だけの「自分通信」、あなたも発行してみては?」

◇ ◇ ◇

うーむ、奈良さん、三十四歳! 当時、私は二十五歳、

入社2年目の新米記者だった。

この定有堂が始めたリーフレット運動は、「定有」「定有堂ジャーナル」「音信不通」と名前を変えながら、四十一年後の今も続いている。

その一週間後、3月9日の「水曜ヤング」には、のちに鳥取市民図書館長になる西尾肇さんの記事が出ている。これもそのまま転載しよう。

◇ ◇ ◇  
「一冊百円、文庫本サイズのかわいい雑誌の名前は『紙魚(しみ)』編集人の西尾肇さん(29)は四年前に東京から鳥取にUターンしたが、『“本好き”や“読書好き”が集まって、自分の読書歴や本への思い入れを語り合える雑誌を地元から出そう』と執筆者を募り、千部発行。市内の書店に置いてもらったところ、またたく間に売り切れ、増刷するほどの人気を集めた」

◇ ◇ ◇  
西尾さん、二十九歳! 「あの頃キミは若かった」。そういえば、私が入社した頃、鳥取では商業ベースではなく安藤隆一さんから若者グループが自主的に編集運営するタウン情報誌「スペース」も元気がよかった。

思い出したが、その頃、私も社内でも同世代や後輩たちを誘って「ストロベリーフィールズ」というミニコミ誌を発

行していたなあ。ピートルズの「ストロベリーフィールズ」27  
と「いちご(十五日)」をひっかけて、毎月十五日、自分のページを人数分コピーして居酒屋に集合し、みんなでホチキスで止めて「ハイ、完成」というミニコミ誌。

◇ ◇ ◇  
エッセーあり、ポエムあり、マスコミ論あり。若者の自由気ままな発表の場だったが、やがてダラズな労働組合を私たちの手で立て直そうという運動に発展した…。

◇ ◇ ◇  
SNSが窮屈というか、うるさく厄介な存在に感じ始めた。年だろうか。誰か分からない不特定多数の「いいね」など、もういらぬ。スマホはあくまで連絡用ツールで、一日中のぞく時間があれば、人が書いたものをじっくり読みたい。語り合いたい。

最近、『華氏451』というブラッドベリのSFが頭に浮かぶ(のちにトリフォアが映画化)。書物を読むことが禁止された近未来。本は全て焼却処分され、人々はテレビで思想統制されている。そんな現実から逃げ出した主人公がたどり着いたのは、「本の人々」が隠れ住む森だった。彼らは書物を暗記し子供たちに伝えていた。  
そんな「森」をどこかに残しておきたい。

## 今日の日記と、音信不通

鳥居 貴彦

(開風社 待賢ブックセンター)

今朝、大学の研究室から引き取ってきた古本が段ボールに入ったまま店の前に積み上がっている。もう午後三時すぎ。幼稚園バスが隣のいっくんを乗せてやってきた。いつもランドセルを背負ったまま店にやってくるキヨちゃん。今日は珍しく自転車の後ろに乗って帰ってくる。「気分が悪いつて言うから迎えに行ったのにぴよんぴよん跳ねながら保健室から出てきて」とお母さんはぶつぶつ言っている。となりでいっくんはシャボン玉を始めた。中学生たちがぼつぼつと帰ってくる。どうやらしりとりをしているようだ。妙に盛り上がっている。段ボールから取り出した古本はほとんど店の中に積み上がっていくだけでどうにかかなりそうな気配はない。

作業しながら頭では数日前から気になっているメールのことを考えている。来月の藤井大丸の古本市のことをみんなに連絡しないといけない。十二月に沖繩へ送る古本のこ

とも返事が返ってきていたはずだ。奈良さんから原稿どうですかと連絡が来ていた。もつと前からドラマリアさんからもメールが来ていた。なのにもう月末だ。

四時すぎ、ゆうくんが散歩に出てきた。「あー!」とか「きゃー!」とか言う声が聞こえてくる。今日はよちよちと本屋に入ってきた。いらつしやーいと迎え、火のついていない蚊取り線香をぐるぐる回して一緒に遊ぶ。ゆうくんのお母さんは育休前、キャラクターや似顔絵をデコレーションしたケーキを作る人だったらしい。ここに看板出して注文受けてみたらどうですか、などと言ってみる。気づくともう五時だ。息子が学童から帰ってくる。「ただいまー」と今日は少し元気がない。「いおりちゃんと約束してきた」とランドセルをどんと置く。晚ご飯は三日前のカレーを温めるだけだ。何かもう一品あったほうがいいのだろうか、と考えながら米をとぐ。居間でテレビを見ていたはずの息子が「だれ?」と言って店の方に出て行った。じゅんが「五時に帰ってきたって言ったのにこいつー」とお母さんに首根っこを掴まれている。「保育園のバザー今週末ですわ」と話しかけれなんの準備もしていなかったことに気づく。月の初めの用事は月末には忘れがちだ。「バザーに出すようにうちにある絵本持ってきてもいい?」と言い残してじゅんとお母さんは帰っていった。

唐突に支払いの準備をする。今月は日販への支払いがマインナスなので気がラクだ。九月に福岡でやった古本市の売り上げも入るはず。三重の古本市の売り上げはまだだろうか。どうやらまだ来月も本屋を続けられそうではある。来年のことはわからない。本屋を続けられそうだと自分を納得させるのに必要なのはお金だけではない。来月もまたきてくれそうな人の顔が何人思い浮かぶか。山内さんはきつとくるだろう。林さんもまたすぐくる気がする。三好さんは夏から見えていないが大丈夫だろうか。涼しくなったからそろそろ来そうだ。岩永さんの取置き雑誌はもう三冊たまっている。NHKラジオの取置きの二人も今月まだ来ていない。酒井さんに取り寄せを頼まれた本はいっ届くだろう。

近所の子どもたちも、毎月来てくれるお客さんも、小さな本屋がなくなっただけで別に困らない。でもその人たちを言い訳にして本屋は本屋を続けている。

「音信不通」を書くことも、来月本屋を続けるための言い訳のひとつだ。あるライターの方に「音信不通を読んでいるので近況はだいたいわかっているのですが」と話を切り出され驚いたことがある。どこかで誰かが読んでいるとは思ひもなかったのだ。誰に向けて書いているのだろうか。

六年前、「書くことが好きなのですか」と奈良さんは言った。読んでもらうことはうれしい、と答えたような気がする。それ以来「今月はどうですか」と毎月声がかかる。ほとんどのメールに返事ができていない。最後の最後に、言い訳のように何か書いて送る。原稿はパソコンの「練習」というフォルダに入れる。なんの練習なのかさっぱりわからないが、もう五十くらいの原稿が「練習」のフォルダに入っている。

閉店間際になって、みきが絵本を抱えてやってきた。「まだまだある」と言う。店の前に積んだままになっている段ボールをのけて、台車を取り出す。これ使う？と聞くとみきはガラガラと音を立ててマンションに戻っていった。結局、じゅん、みき、お母さんが三往復して店の中に本の山がまた増えた。明日から絵本に書いてある名前をマジックで消すからお手伝いしてね、と言うとじゅんが「朝五時に来よう、学校いく前にできるから」と言った。それは眠いなあ、と答えながら明日も本屋を開ける言い訳が見つかった、とか思っている。

本を作る側から (20)

## わたしの「音信不通」

村瀬 謙介

(小取舎)

「村瀬さんも音信不通に寄稿しませんか」と奈良さんから誘われたのが、二〇カ月前になる。引き受けてからというもの一カ月が異様に早い。あつという間に原稿締切日が訪れる。

音信不通はフリーペーパーだ。ミニコミという表現の方が適しているか。十年間、月刊誌のフリーペーパーを作っていた私もよく考えればフリーペーパーと本の違いがわかっていない。一〇〇頁ほどのポリウームの号も出していたのでこれは本といえは本である。無料かどうかという差がある。しかし大手出版社の本であっても売れ残った本は無情にも焼却される運命の本はたくさんある。これをだからといって無料で配ったら本ではないかと言われたら本である。『音信不通』も百号まで出ると本だと言えらるのではないか。ミシマ社の『ちやぶ台』は本で、音信不通は本ではないとは思わない。『音信不通』が無料であつ

てもだ。

出力したA4用紙をまとめて左端をホチキスで留めると資料という存在にとどまる。しかし、同じホチキスでも刃を留めると本のようになる。短辺どじでもファイルのように留め具(プラスチックの留め具の名はペーパーフラスナーというらしい)で留めるとやはり資料のようになり、穴を開けて紐でくくると本のようになる。この違いは何だろうか。本の定義はユネスコで四九頁以上と定められているが留め方については特に言及されていない。布川角左衛門を編集委員長とする一九七一年発行の『出版辞典』には「紙葉がバラバラにならないようにひとまとめにされ、製本によつて中身と表紙がそろっていること。」と記載されている。ということとは留めるのが辺であつても角であつてもホチキス留めは正真正銘の製本であるといえる。

他にも『出版辞典』には書籍の定義が載っている。ここには「内容が紙葉に印刷されていること」と書かれている。これについては今では電子書籍やオーディオブックがあるので発刊当時の定義はこの限りではない。もう一つ、定義に「文字、図録、写真などについて、伝達を目的として表現した内容があること」とある。これが前提だとするとク

ローズドな日記やノートは、辺を糊で留められているが本ではない。考えれば、ノートや日記帳はすでに製本されたものに書く。しかし、書かれた日記の内容を編集・製本すると、ノートや日記と同じ内容であっても、自分以外の誰かに伝達する目的を持つため書籍となる。このことから推測すると、製本するという行為自体に、人に伝えたいという思いが込められているからなのではないか。

「誌名を『音信不通』としたのは、しかし、このパブリックもいまではどうでもいいことだと思えてきたから」だと奈良さんは『音信不通』の第二十五号に綴っておられた。続けて「パブリックを捨てたところにあるものは、あいも変わらず「自分くくり」という端緒への回帰だ」とある。

『音信不通』は沈黙へ向かう個人誌という位置付けだとも書かれており、そうか『音信不通』は沈黙に向かっていたのかと初めて知った。しかしプライベートへと向かっているなら、ミニコミとして製本されているが伝達を目的としていないということになる。いや、待てよ。パブリックはどうでもよいということは、その反対語であるプライベートに向かっているとは限らない。この号でミニコミについて寄稿された奈良さんの文章には自己同一性や小さな声がキーワードとして出てくる。つまりここでいうパブリック

とは公共という意味ではなくマジヨリテイという意味合いが強く、かねてから公共というものはマジヨリテイのものではないと考えている私は納得した。「ミニコミ||自分くくり」とするならば自分くくりの「自分」は「個」ではなく、「自分(と同じ考えを持つ者)くくり」であるといえる。『音信不通』は寄稿者が自己の内面へと向かわれるのと同時に、そういった同じ小さな声を持つ同志への伝達である。

自分を縛るくくりから解放されることが自分らしく生きるために必要だと、私と同じ年の小説家、山崎ナオコーラ氏がインタビューで言っていた。くくることの大切さ、そしてくくりからの解放。その両方が人生には必要なんだな。



## 宛先不明

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

いささか古い話で恐縮だが…、

戦前のこと、「図書館の屋根の下」という文句が、ある種のキャッチフレーズとして使われていた時期があった。ルネ・クレールの映画「巴里の屋根の下」(一九三〇)が公開され、話題になっていた時分で、そこからの戴きらしい。

当市に新しい図書館が誕生し、夕方になると、食堂に文人たちが集って談論風発、これを足場に学習会や講演会が開かれ、多くのサークルが誕生して行った。そんなムーブメントを総称した言葉のようであった。

困難な時代ではあったが(現に特高にマークされていた集会もあったという)、夢があった、希望があった、理想があった。

「私の青空」(一九二七)というアメリカ生まれのポピュ

ラーソングがあり、戦前・戦後を通じて多くの歌手によってカバーされ続けている。「狭いながらも楽しい我が家」の訳詞で有名な歌である。

フォン・ゲッツィの演奏が一世を風靡した「碧空」(一九三六)というヨーロッパ・タンゴもあった。

今回の特集に当たって、改めて『町の本屋という物語』(作品社)を読み込んだ。

「本屋の青空」という言葉があった。「図書館の屋根の下」とよく似ていると思った。

定有堂書店とは、客として開店当初からのお付き合いだが、教室や催しなどへの参加は、大分後になってからで、恐らく、八七、八年頃からはなかっただろうか。

きっかけが何であったか、シネクラブへのお誘いだったか、夕食会へのお誘いだったか、最早定かではない。

前者は、NHKのディレクターを講師にした映画の鑑賞会。ついぞ自分から率先して観ることはないだろうという作品ばかりで、世界が広くなり、シネマ・クリティークの何たるか、にも触れることができて実に有難い教室であった。

後者は、時々折々のゲストを迎えて、持ち寄りで行う食

事会の総称である。概ね店舗の二階で行われたが、焚火の会と称して野外でバーベキューを催したこともあるし、湯豆腐を食べに南禅寺まで出かけたこともある。

ここで、様々な人との知遇を得た。教師や医師、アーティスト、出版関係者、等々……この時の人脈は貴重な財産となった。

そうした中で、「定有」(第二期)へのお誘いがあったと思う。調べてみると、第七号(一九八九)への寄稿が最初である。思想系の難しい論文の中に、一人だけ妙に場違いなことを書いてるのが可笑しい。

そして、「定有ジャーナル」の時は、今度、書評誌を出すんですが、どうですか、という流れだったと記憶する。

好きな本を読んでレビューするのだから、まあ楽勝、と考えたのがそもそも心得違いで、毎月、途切れなく続くとなると、難行苦行となる。編集長の督促も苛斂誅求を極めてくる。

そう毎月、都合よく、お奨めできるような本が出る筈もなく、また、出ても文章に書き辛い作品もある。飽きられないよう、文体の工夫も必要だ。結局、一知半解のまま書き流したり、過去の読書履歴から引っ張り出して体裁を整

えたり、と余り他所様にはお聞かせできないような舞台裏であったのだが、それでも、十年間、休みなく続けたのは良い修行であった。

今、「音信不通」(第二期)が百号を迎える。二〇一六年の創刊だから、はや八年である。継続は力なり、というけれど、八年、十年、月刊ペースを維持するというのは、それはそれはもう(ここは大文字で強調しておきたい)、並大抵のことではない。ましてや、紙媒体であるから、なおさらだ。ただただ、主宰者の情熱と、編集者の不断の努力に頭が下がるばかりである。

しかし、本当にそれだけだろうか。説明しきれない何かがありはしないか。書店とか、印刷物といった枠組みを超えて、有機的に成長し続けている何かが…。

それこそが「本屋の青空」「アジール」「隠れ里」「ノアの箱舟」「ビオトープ」の求める所ではないのだろうか。

## 「きよなら」を告げて

三浦 永理

(青翔開智中高教員)

私が最初に「音信不通」に記事を書いたのは、今回の百号に及ぶところのちょうど折り返し地点のあたり、五十号だった。その時は、当時三年前に亡くなった祖父の思い出話を書いた。一昨年、母方の祖父も相次いで亡くなり、そのことも記事に書いた。この「音信不通」を書いてから、私の家族の様子もよくある順序で変化した。亡くなってしまえば、相手とは「音信不通」になる。

二〇二〇年、当時は、コロナによる警戒が高まっていた。手洗いうがい消毒、マスク着用が当たり前だった。私たちはその頃の思い出を忘れて、普通の日常を取り戻そうとしている。そのころ、生成AIはまだ大きな脅威ではなかった。今や、私が好きな文章を書くという行為は、AIに代替されうるものだと思う。ここまでの五十記事を読み込ませたら、私が書きそうなことを生成してくれそうだ。

つまり、「音信不通」との日々は、鳥取に引越して数ヶ月で始まった。別れを告げた東京の知り合いといつ会える

かわからないまま、連絡を取り続ける日々だった。

東京から鳥取に来て五年目。東京で仲良かった友人たちとの関係も少しずつ変わった。鳥取で仲良くなった人の中には、鳥取を出てしまった人もいる。二十代半ばから三代へとステージが少し変わる年齢で、連絡しなくなった友人もいる。

そもそもなぜ「音信不通」という名前なのか、よく聞かずに関わり始めてしまった。ただ、小さな冊子として刷られる「音信不通」は、オンラインで記事を発信するのとは違う手触りがあることは確かだ。すぐにコメントや、フォロワーのお知らせが来るのとは違って、どこか虚空に向かって書いているような感覚になる。最初の頃は、いやしげらくは、誰にどう読まれていいのか、ピンと来なかった。が、どうも近所には読んでいる人がいるらしい。そんな実感がちゃんと生まれたのは、今年に入ってそうやって声をかけられることが増えたからかもしれない。

「音信不通」という一般名詞が示すのは、コミュニケーションの断絶だ。私はどこかでそこに「きよなら」を感じ取っていて、そんなことばかり最初書いていた節がある。一つ目の記事は亡くなった祖父、二つ目の記事は『きよなら、俺たち』という本についてではなかっただろうか。(と

勘で書いていたら合っていた。) )

そして、書き始めてすぐやってきた雪の季節の鳥取の風景も脳内に浮かぶ。雪景色でしんしんと雪が降るように感じるのは、雪が実際に音を吸ってしまうからだそうだ。静まった雪の街。空から白い物体が降ってきて、地面に止まる。厄介な雪。冬といえば、乾燥した晴れの天気だった東京からやってきた私にとっては、新鮮な風景だった。

雪で静まり返った鳥取では、時には汽車も止まって、外界から断絶されるような時がある。あの時のどうしようもなさ、こんな天気では外にも出られないといった雪の日。あの隔絶された思いが、「音信不通」の私にとっての原風景かもしれない。

雪の季節になると、それはすなわち実家に帰省する季節でもある。雪の積もった鳥取に「さよなら」を告げて、一時間移動するだけで、カラッとした太平洋側に出る。季節が一つ戻ったような風景だ。鳥取の通りに人はいなくとも、コロナの中でも東京にはそれなりに人通りがある。その目眩を起こしそうな変化が、私には受け入れ難い時がある。鳥取にいても私は東京の人間だけれども、東京に行けば鳥取のことがちらつくようになる。

そのような往復を繰り返す中で、いつか私は、この鳥取とも再び「音信不通」になるのではないかという予感がし

ていて、そのことも正直に書いてきた。私は今いる場所から切断される、自ら切断することで、次に進めるはずだから。

「さよなら」は切ない感情を伴う。私にとっては、その切なさを切り取ることを続けた五年だった。ただ、「さよなら」を通じた切断への決意は、時には強い印象を持たれることもある感情でもある。それは次への飛躍や、未来を含意しているからかもしれない。

それでも物体として刷られていく「音信不通」のおかげで、私の言葉は鳥取の各地に降り積もっているのだとも思う。そして、その人がそれを読んで思ったことは私には届かぬまま、その降り積もる雪に吸われていく。

どうかこのまま「音信不通」で。私の言葉があなたを後押しするもので、あり続けますように。

ということ、タイトルが最後のようになっていますが、そんなつもりはありません。すみません。

続く限りは、私も私自身の手で書き続けたいと思っています。よろしくお願ひします。

## わたしの音信不通

齊藤 仁昭

(ケバブジョンソン)

元長崎書店勤務

九月某日

音信不通が100号を迎えるということことで次号は「わたしの音信不通」というテーマだと編集長より連絡をいただいた。100号ってすごいなー僕いつから書いてたっけ、最近では体調のこととバンドのことと仕事に行きたくないことしか書いていないのにいつまでも書き続けていいのかしら、締め切りも毎月数日過ぎてお待たせしてるし、何度か飛ばしちゃったしなどと考えながらまた来月末ギリギリまで原稿に手をつけられないのかな、ということを考えているともう月末がやってくる。というサイクルが、初めての坪井日記のマイクロソフトワードの保存日を見ると2018年1月、6年以上前から続いているのだが、当初は毎月書いていたら文章が上手くなるんじゃないかと思っていたのに全く上手くなっておらず、もう今まさに書くことに行き詰まってそれで手元にあった保坂和志の『読書実録』を手にとってみると、「吉増剛造が最近の対談の中で筆写、書き

写しをしているのだと語っていた、吉増剛造は吉本隆明の『日時計篇』から筆写をはじめて、『マチウ書試論』『西行論』と筆写し、いまは『言語にとつて美とはなにか』の第二巻の近松論のところまでできているとその対談の中で語っていた、『言語にとつて美とはなにか』なんて、あの厚い本を書き写すとはー」とあつて、自分に足りないのは筆写かも知れないと思いつつも多分できないというかきつとやらないだろうと考えて、文章の上達を諦めた。そしてそもそもこの本のこの章は文章が上手くなるとかどうの話は書かれていない。

音信不通を初めて読んだのは長崎書店に勤めているときで、2016年か17年だったと思う。確か奈良さんが長崎社長に送ってくれたもので、社長はこれを何度も読んだようで、僕にも勧めてくれた。奈良さんのテーマは「縮小」だった(バックナンバーを見つけれず。データがあったら読みたいです)。すぐにはピンと来なかった。ピンと来る感覚がなかったと言える。当時に縮小、という言葉を使うのは若干ネガティブな気がしてしまっていたが、社長と共に何度も読んで、じわじわと体に沁みてきた。数年の射程で、長崎書店にも大きな影響を与える、与え続けている文章だと思ふ。

音信が不通であるのに皆がそれぞれに発信していて、

私はそれを熊本で傍受しています。毎月末席でお邪魔しておりますが、筆者の皆さんの文章を楽しく読ませていただいています。

十月某日

元ちくき正文館の古田さんの訃報を受けとる。街で酔っ払って歩いて帰っている途中にインスタグラムを開いたら大友良英氏の投稿にその旨が載っており、えーマジかよとぼんやりしていたらインスタに名古屋の知人・上原さんからメールが入っており、十日の朝に亡くなられたとのこと。店が閉まってしまうから一度会いに行つたが会えなかった日があり、悔やまれる。勝手に古田のとつとつあんで呼んでたけど許してください、お世話になりました。

十月某日

名古屋にてライブ。会場はKDハボン。当日の朝、どうしても仕事に行かねばならず出勤。なんとか予定を済ませ、高速バスにて熊本空港へ向かう。バスの名前は「スーパーばんぺいゆ号」二十人ほどしか乗れない小さなバスで、かわいらしくて結構好き。八代駅前から空港まで1時間ほどで行ける。空港でマーベルのゲームをしていたらゴーという音が耳に入る。飛行機の着陸音だと思っていたがやたら

と長く続くので外を見たら豪雨だった。使用予定の飛行機がなかなか着陸できないとのこととで45分の遅延。なんとか小牧空港に着いて走ってバス停に行きギリギリバスに乗れた。終点の名古屋駅からJRに乗り継ぎ、鶴舞駅へ。こちらも雨で、濡れながら会場へ。馴染みの面々とあえてホッとする。

出演予定の一組がキャンセルになったので僕らの演奏が1時間に延びた。楽しく集中して演奏できた。ハボンの美味しいお酒とビールをいただいて散会。

十月某日

ハボンの翌日。古田さんの訃報を知らせてくれた上原さんが、円頓寺という街の商店街で「本のさんぽみち」というイベントを開いているというので立ち寄る。古書店や出版社、一般の方々が集まってアーケードにてフリーマーケットを開いている。夏葉社の島田さんもいらして、色々とお話する。詳細は省くが、「人生は一度きりですから」という言葉が忘れられない。

イベントのボランティアでいらしていた方と話していたら、なんと音信不通の読者の方で、僕の文章も読んでくれているとのこと。感謝と驚き。驚きと感謝。

# 私と音信不通

あぎの素生

(くうねるめがね)



「はらべこめがね」という絵本作家さんがいる。音信不通に誘っていたら、「名乗り」を考える段になって、真っ先に浮かんだのはこの言葉だった。

初めて読んだ音信不通は二十号だ。執筆者のみなさんが、様々なテーマ、様々なスタイルで寄稿されていて、その自由がいいなと思った。書いてみませんか、と声をかけていただいていたうれしかった。ただ、自分に何が書けるのかということに気がかかった。

何か好きなことを書く。自分は一体何が好きなんだろうか。そんな問いには、いつも戸惑う。自分が好きなことやものは、普段はその辺にふわふわと漂っていて、目の前の事柄と合致したときにうれしくなる、みたいな仕組みになっている気がする。でも、いぎ正面切って問われてみると、ふわふわしていたあれやこれやは雲散霧消して、はて、と途方に暮れる。それに、一番とか、特別とかいう冠をのせ

た答えを探さなければ、と勝手に力んで、余計答えが見えなくなる。好きなことやものが思い浮かばないというのは不安なものだ。自分がひどくつまらないもののように感じられたり、自分が何者であるかを見失ってしまったような感覚に陥ったりする。

話がそれた。何か好きなことを書く、というお題を前にしたとき、頭の中をぐるりと見まわして、「ああ、食べることは好きだな」とじんわり思った。今まで食べたものの中で、特別記憶に残っているものがいくつも思い起こされて、これなら書けるのではないか、とも感じた。

ひとが作ってくれた料理を食べるのも、自分で料理を作るのも好きだ。自分で作るのは気分転換の一環で、しかも食べたいものが食べられる。こんなにいいことはない。代謝がいいのか、すぐにお腹が空く。朝ごはんを抜いてはだめですよ、とよく耳にするのが、朝ごはんを食べずに行動すると頭がくらくらするので、抜きたくても抜けない。「健康的な食生活」を送ることを余儀なくされている。料理をするのは好きだが、卓越していたり、手早かったりするわけではない。自分で作れる量は限られているから、大抵お腹が空いている。といった理由で、「はらべこめがね」が

じっくりくると思った次第だ。ひとのものなのであきらめて、寝るのも好きだな、というこで、今の形に落ち着いた。

子どもの頃、まんがを描くのが好きだった。最初に書いたまんがは、ちりとりとほうきをモチーフにした衣装で戦う女の子二人組の話だったように思う。小さく折りたたんだ紙をホッチキスで止めて、鉛筆で一頁にひとコマの絵を描いた（コマの概念はなかったかもしれない）。長じて、学校で友人に手紙を書き、そのレポート用紙をシャツ型やハート型などに折って交換するのが日課だった十代。高校生になると変化を求め、小さい頃作っていたような小冊子に、雑誌を模倣した表紙を書き、手紙とは別に短い連載（風まんが）を載せた。三回くらいは同じ体裁で書いただろうか。それがとても楽しかったことを、今回ふと思いつ出した。音信不通に文章を書くことは、あの手紙を書くことと似ている。うまく言葉で表せないが、楽しさの構造が、似ている気がする。

最初に思い浮かんだ、いくつかの記憶に残る食べものことは書き終えてしまったが、そのほかの好きなもの（尾崎放哉やめがね、旅）、そのときどきの生活とその中で食

べたり、感じたり、考えたりしたことを、書いていると、自分の輪郭や芯みたいなのがはっきりしてくる気がする。あれが好きだこれが好きだと書きたくなるのは、そんな理由からかもしれない。ビオトープの端っこで生かされている。

百号おめでとうございます。



イラストあきの素生

## 気がつけば その二



ドラメリア (座敷わらし)

気がつけば八年経っていたらしい。

「新しくミニコミ誌を作ろうと思つて」と聞いたと思つたら、いつの間にか作る側になっていた。その間いろいろあつた。職場が替わり、また同じところに戻つた。編集作業をしていた本屋は閉まつたけれど、また同じ建物に新しいアジトをこしらへることになった。ほんの一瞬だけ別名で書いたこともある(が、別に探してもらわなくてよいのです)。そういえばこの名を名乗ることになったのも、最後のスペースに書くからだつた。元々これは店内にあつたコーナーの名称であつて個人の名乗りではなかつたのだが、「この冊子を作っているドラメリアさんです」と紹介されるうちに既成事実となつていた。

八年も経てば編集やら印刷やらあれこれ進歩していくものもありそんなものだが、創刊からこの百号までほぼ変わらず同じやり方で作っている。紙折り大変!

製本作業がどうにか楽にならないものかな、いつそマシンを導入してはどうだろうと考えたりもするが、それほど

大部数を製作するわけではないので踏ん切りもつかない。一ヶ月間で五月雨式に集まつた原稿をせっせと型に流し込み、完成したらひたすら印刷して、延々と折りと綴じをくり返す。そうこうしているうちに次の締め切りが近づいてくる。

そんなふうにならなくてもいいので、よろしくお願ひします。ただ何しろ座敷わらしなので、姿を隠しているときもある。そんなときは「今ちよつと隠れてるんだな」と思いながら見守つてほしい。見えるところにいなくても、手に取つたその冊子を折っているのは座敷わらしかもしれないので。



・編集後記:

二年越しのねりん狂騒曲がついに終幕、燃え尽き気味の秋です。百号記念に寄稿してくださった皆さま、ありがとうございます。ドラメリア (編集長)

奈良敏行三砂慶明『本屋のパンセ』作品社発売記念で、この特集号が「特典」として一部書店に提供されます。いつもより発行部数が多いので悩んでいたら、浜田浩之さんのついで、高速印刷ができました。友情に感謝。奈良敏行 (発行人)